

序

「教科書は間違いばかりなんだよね」——『Smith's anesthesia for infant and children』の編集者であるピッツバーグ大学の本山悦朗教授から、こんな話を伺ったことがある。ちょうど本山先生が、この教科書の編集を前任者から引き継いだころであり、間違いだらけなのはその名著であった。私の留学中のメンターである John E Remmers 教授からは、『査読されない教科書は業績ではないから』と、彼が依頼された教科書の睡眠時無呼吸の病態生理の章を書くように言われた。教科書は、全体の流れをつくるために著者の個人的な経験や意見、古くからの言い伝えに基づく記述が多くなりがちである。素直に真実と信じ込んでいると、後の臨床研究で誤りであったことが証明されることもしばしばである。本山先生がおっしゃるように教科書に書かれていることは、研究が進めば間違いであることもしばしばであり、われわれの臨床も変化すべきなのである。

この教科書は、通常の麻酔管理はすでに十分できる麻酔科医が、例えば“なぜ麻酔導入時には酸素を吸入する必要があるのだろうか”“なぜ気管チューブを抜去する前に覚醒するほうが安全なのか”など、自分の行っている周術期呼吸管理の一つひとつのステップを考え直してほしいと願いつつ企画した。企画に賛同していただいた執筆者の皆さんは、麻酔科医師として知っておいてほしいと考える最新の知見を盛り込んでくださった。にもかかわらず、この教科書にも今後の臨床研究の進展に伴い誤りとなる内容があるはずである。読者である麻酔科医には、この教科書に記載された内容の矛盾や誤りに気づき、ぜひ真実を見つけていただきたい。その積み重ねが、麻酔科医の周術期管理能力を高め、周術期医療をより安全かつ質の高いものにしていくものと信じております。

2017年1月

磯野史朗